

マイノリティの社会参加 目次

序 少数派のリテラシーと社会参加 佐々木 倫子 iv



▼第1部 当事者が語る教育と社会の現実▼

第1章

ビジュアル・リテラシーの重要性

—1 ディスレクシア当事者の声

神山 忠 2

第2章

テクノロジーとリテラシーの多様性

—1 ロービジョン当事者の声

森田 茂樹 14

第3章

聴者の家庭に生まれた1ろう者の声

小野 広祐 27

第4章

デフファミリーに生まれた1ろう者の声

川島 清 40

第5章

モンスターの分析

— 不確かな人類学とろうのスーパーヒーローの生い立ち

ヴァレンティ, ジョセフ M 46

第6章

ろう者がろう者に聞く

— ろう学校でリテラシーは育成されたか

中山 慎一郎 70

▼第2部 当事者と社会参加▼

第7章

当事者と非当事者

斉藤 道雄 88

第8章

デフ・インタープリター入門

アダム, ロバート 108

第9章

ろう児に対する教育政策

— 障害児教育かマイノリティ言語教育か

岡 典栄 130

▼第3部 社会のバリアフリー化と多様なリテラシー▼

第10章

情報のユニバーサルデザイン

あべ やすし 156

第11章

ろう児のバイリンガル・リテラシーの育成

ガラテ, マリベル 180

第12章

マイノリティと多様なリテラシー

佐々木 倫子 197



あとがき 当事者と非当事者の協働

佐々木 倫子 219

索引

221

序

少数派のリテラシーと社会参加

佐々木 倫子

本書のテーマは「多様なリテラシー」である。全編を通して「リテラシー」とは何かを考え、マイノリティ言語話者のリテラシーと社会参加を考える。以前は「マイノリティ」とは、在日コリアンや日系ブラジル人といった、いわゆる民族モデルを意味したが、現在は、障害、性別、年齢、人種、宗教、性的指向等にも同様に用いられている。本書では、特に「障害」を採りあげ、その世界の多様で、複雑、課題に満ちて、しかも豊かなりテラシーを見、教育と社会のあり方を考える。障害者施策、マイノリティ施策が大きく動きつつある現代にあって、障害当事者の声を出発点に、施策から教育現場までを考えたい。「障害＝福祉の対象」ではなく、いきいきと自身の個性を生かしつつ社会に参加する、十全たる市民が育つことこそ、望まれる社会の姿であろう。そして、それは適切な教育のあり方、社会のあり方によって実現可能なはずである。

豊かさは多様性によってもたらされる。グローバリズムの嵐の中で、自然言語の数さえも、6,000 から 3,000 へ半減するだろうとされる 21 世紀に、本書は言語の多様性、リテラシーの多様性を示すことを目指した。世界の言語の目録であるエスノログには、2013 年 9 月末の時点で、世界の手話として 130 を超えるものが挙げられている。そして多くの研究者の働きで、新たな手話の記述が進んでいる。しかし、それらの大半は危機言語とみなされる。話者が減少する要因には、隣接の強い手話からの圧力というケースもあるが、手話環境の乏しさ・欠如、人工内耳などのテクノロジーの発達による聴覚至上主義と、ろう学校の教育における手話言語の軽視という要素も大きい。

本書の第 1 部「当事者が語る教育と社会の現実」には、6 人の障害当事者が登場し、発信する。そのすべての主張に共通して見られるのが、周囲のマイノリティ（多数派）の認識の不十分さである。マイノリティがマイノリティから

第1章

ビジュアル・リテラシーの重要性

— 1 ディスレクシア当事者の声

神山 忠

1. はじめに

現在、世界で使われている言語はいくつぐらいあるのだろうか。言語として認められているものに加え、方言なども入れるとかなりの数になると思われる。しかし、どの言語が優れているとか劣っているとかを決めることはできない。

私は、パソコンでプログラミングをすることが得意だが、そのパソコンのプログラミングで用いられる言語も多様である。計算に長けているプログラム言語、画像処理に長けているプログラム言語、ネットワーク構築に向いているプログラム言語…それらは常に進化するだけでなく、新しく言語が増えてきている現状がある。人が使う言語も同じことが言えよう。このようなことを私が論ずるのは、僭越であると自覚する。しかし、私がこれから述べることの前置きとして挙げておくことは、本文に対してより実感が湧くと思い、冒頭を書くことにした。

2. ディスレクシアとは

一般的に言われている「ディスレクシア」とは、「学習障害の一種で、知的能力及び一般的な理解能力などに特に異常がないにもかかわらず、文字の読み書き学習に著しい困難を抱える障害」である。発見以来、現在に至るまで確実な定義は決まっていないが、スノウリング（2008）は「話し言葉の音韻的特徴を脳が符号化する過程に影響を与えるような言語発達障害の特異的な形態」とし、「根本的な障害は音韻処理過程にあり、その背景には音韻表象が具体性に乏しいという問題」（pp. 264-265）があるとする。

私は、このディスレクシアの当事者である。ディスレクシアの特性をもつ有

第2章

テクノロジーとリテラシーの多様性

— 1 ロービジョン当事者の声

森田 茂樹

1. 視覚障害の当事者自身がおこなうロービジョンケアの16年

1.1 自己紹介—その1

私は現在66歳、視覚障害1級の当事者である。「ロービジョン (low vision)」とは見えにくいという困難を有する人や状態を指す用語であり(青柳・鳥山, 2012, p. 12), 私は自身でそのケアに取り組んできた。1993年46歳のときに、急速な視力の低下を自覚し、京都大学医学部附属病院を受診、難病に認定されている網膜色素変性症と診断された。網膜色素変性症とは、基本的には視細胞が多くの場合、周辺部から中心に向かってアプトーシス(細胞自死)しつづける疾患であり、現時点ではその進行を止めることは無論、遅らせることもできない。半年後業務の遂行が不可能となり退職。「もう生涯、読み書きできない」との思いに打ちのめされ、真っ暗なトンネル生活に入る。私には明確な失明の可能性よりも、いま現在読み書きができなくなったことのほうが大きな衝撃だった。

3年後、あるきっかけから給付制度の対象であった「拡大読書器^{注1}」の存在を知り、制度を利用して、比べて、選んで、入手した。たちまち私は「もう生涯、できない」と思っていた「普通の読み書き」をほぼ完全に復活できた。拡大読書器、および、3年間の私の辛い生活については、森田(2000)に記したが、この3年間の思いは一体何だったのか。

責任の第一は自分にある。衝撃を受け、ただただ落ち込んでしまった。その状態で「できない」を「できる」に変える手段を探るという発想を持ってなかつ

注1 拡大読書器については、森田(2000)に詳しい。

第3章

聴者の家庭に生まれた1ろう者の声

小野 広祐

1. はじめに ― 私にとっての口話とは

「僕は幼稚部3年生のとき、杉並ろう学校に入学しました。そのときは、何も話すことができませんでした。小学部に入ってからは、家でも毎日のように発音、発声の練習をしてきました。辛い日もありましたが、そのおかげで、今日はこのような立派な川本口話賞を頂くことができ、とても嬉しいです。熱心に教えてくださった先生方、そして両親に感謝しております。本当にありがとうございました」

このスピーチは杉並ろう学校中学部卒業式で川本口話賞を頂いたときのものである。川本口話賞とは手話を否定し、口話法によってろう教育を推進した川本宇之介かわもとうのすけ氏の退職記念に設置された賞で、口話を身につけ、優秀な成績でろう学校を卒業した生徒を表彰するものである（1999年をもって終止）。卒業した学校は厳格な聴覚口話法主義であり、思い出すといまでもぞっとするような厳しい口話訓練を受けてきた。授業はそっちのけで毎日延々とずっと続く口話訓練だったが、「口話ができなければ社会に出られない」と洗脳され、「口話ができれば社会に出られる」と信じて頑張っていた。

聴者の家庭に生まれた私には、学校だけでなく家に帰っても口話訓練が待っていた。聞こえない子の親の約90%が聴者であることを考えたら、同じ境遇のろう児は、程度の差はあれ似たような状況だっただろう。しかも音楽を専門とする音楽家である父から聞こえない息子が生まれたとなれば、形勢は不利である。その父から、小学部を卒業するまで、どんなに具合が悪くても、家出をしたいくらい逃げ出したくても、休むことを許されず、毎週末特訓を受け訓練を積み重ねてきた私は、正直なところ、発音・発声ともに自信があった。生まれてからずっと一緒にいる両親も、毎日顔を合わせている杉並ろう学校の先生

第4章

デフファミリーに生まれた1ろう者の声

川島 清

1. 家庭と地域コミュニティで

私は誰もがそうであるように、自分が特別であるということの認識もなく乳幼児期を過ごしてきた。誰もが自分の置かれている環境、状況が当たり前、普通、一般的、と思うものだろう。私は約50年前にろう家族（デフファミリー）のもとに生まれた。両親、2人の兄はろう者である。ただ一人祖父だけが聴者であった。そのような家族環境の中、家庭ではごく当たり前の手話による会話が飛び交い、誰かを呼ぶ時には肩をたたき振り向かせ、遠くにいる家族を呼ぶ時には床をトントンと蹴り、振動で気付かせ事を知らせる、というようなろう文化の中で育ってきた。



写真1 祖父、兄2人と父の膝に乗った筆者

もちろん近隣の家は聴者ばかりである。聴者との関わりにおいては父母の様子をごく自然に見てきた。私の父母であるので、私より約30年前に生まれたろう者である。父母は聴者とのコミュニケーションは筆談というより身振り手振り、簡単な手話によるものが多かったように思う。そして、このデフファミ

第5章

モンスターの分析

— 不確かな人類学とろうのスーパーヒーローの生き立ち

ヴァレンティ, ジョセフ M

1. オートエスノグラフィー (自伝的民俗誌) による解説 — 本物のハルク

1979年8月3日, 金曜日。

ぼくはもうすぐ4才。この夏、ぼくたちはニューヨーク州ベイポートのベイポート通りにある新しい家に引っ越した。足の手術で入院していた間、いい子にしていたから、今日はいつもの寝る時間の夜8時を過ぎてもテレビで「超人ハルク」を見ていいとママに言われたので、ぼくは夜が待ちきれない。ぼくはスーパーヒーローなら何でも大好き。ママはハルクは怖すぎるんじゃないかとずっと心配している。ぼくはハルクとスパイダーマンが一番好きなスーパーヒーローなんだから、と言い続ける。新しいハルクが早く見たい。今度のハルクはマンガじゃない、本物のハルクなんだ。新しいハルクのテレビはバットマンやワンダーウーマンみたいに本物が出てくる。

昼ご飯の後で、ママはおばあちゃんと長い間電話で話している。電話が終わったら、ママがお兄ちゃんのジョンとぼくにうれしい話をしてくれた。もしいい子にしていたら、おじいちゃんとおばあちゃんが来てくれて、いとこたちも一緒に来て、うちでお泊まりをしてもいいのよ。パパとママは外で晩ご飯を食べて、それからイーディおばさんとスティービーおじさんと映画を見に行くからね。

ぼくは大喜びで叫ぶ。「アーライ (オーライ) !」

ジョンもびよんびよん跳んで叫ぶ。「すごいことになるぞ!」

ママは「さあ、早く部屋を片付けてきなさい」という。

ぼくたちが部屋を片付けた後でも、ママは一日中言い続ける。

「早く準備をして」

第6章

ろう者がろう者に聞く

— ろう学校でリテラシーは育成されたか

中山 慎一郎

1. はじめに

筆者は先天性のろう者で、第一言語は日本手話、第二言語は書記日本語のバイリンガルである。友人の大半は、筆者と同じろう者であり、日頃、仕事や私事などメールやファックスなどでやりとりをしている。その彼らが書く書記日本語は、ごく一部の者を除き、個人差はあるものの、残念ながら一般的な聴者レベルと同等というには程遠いものである。

その友人のろう者達の出身校であるろう学校では、その書記日本語をどのように教育していったのであろうか。本章では、これまでのほとんどの論文に共通のろう教育を担う聴者側からの視点ではなく、教育を受けた側の当事者である、ろう者本人の視点を重視し、ろう者本人が自分自身の受けてきたろう教育をどのように受け止めているかを探る。そのため、ろう学校出身のろう者二人に座談会形式のインタビューを行った。

2. 座談会概要

以下の座談会データで、DM はろう男性、江戸川区出身で40代、東京都内のろう学校卒である。DF はろう女性、新潟県出身で40代後半、地方のろう学校卒である。両者共に、近隣の普通校に行くというインテグレーションの経験がなく、日本手話話者であると自覚している。IM は筆者である。

座談会は、ある程度、事前に次のように質問項目を決めておいたが、両氏の関心にそって話を追う形とした。使用言語は日本手話である。

- (1) 確認事項 (小5, 中2, 高2時の在籍学校, 一番理解できる言語)

第7章

当事者と非当事者

齊藤 道雄

1. はじめに ― 人間存在のリテラシー

障害者と呼ばれる人々がいる。

彼らはどんな人たちなのだろうか。何を考え、どう生きているのだろうか。彼らのために、健常者はどんなことができるだろうか。

こんなことを、ふと考えたことのある人は多いと思う。

実際、障害者と呼ばれる人々のところにはしばしば、何か助けてあげられることはありませんか、私にできることはないでしょうかと、支援にかかわろうとする人がやってくる。そしてその背後には、自ら出かけてくることはなくても、障害者を助けるのはいせつなことだと考えるもっとずっと多くの人々がいるはずだ。そうした人々の気持ちで、今日の社会福祉をここまで進めてきた大きな力でもあった。

私はそうした善意や気持ちは、とてもたいせつなものだと思う。けれどジャーナリストとして少なからぬ数の障害者とかかわってきた経験からすると、障害者を助けようという人々の善意や思いは、感謝とともに受けいれられることもある一方で、空回りしたり混乱を招いたり、ときには障害者自身に受けいれがたい押しつけや管理、抑圧になっている事態もたびたび目にしてきた。健常者が障害者を支援するというのは、当然のことのようであり、またその本質はかんたんなことのように、じつはかなり不自然で複雑で、こみいった事柄なのだ。その不自然さ、複雑さは、もっぱら私たちが抱きがちなひとつの単純な傾向から導かれている。すなわち、自分中心のものごとを見てしまうということ。そうした自分の視点と障害者の視点はおなじだと思ってしまうこと。

リテラシーという概念が、たんにことばの読み書きができるという能力を超え、人間存在そのものを読み取る能力にまで拡大されるなら、障害者と健常者

第8章

デフ・インタープリター入門

アダム, ロバート

共同執筆者: アロ, マルクス・ドゥルエッタ, ホアン カルロス
ダン, セナン・アフ=クリントベルグ, ユリア

1. はじめに

本章は、これまでに出版された論文のまとめ (Adam, 2010a; Adam, Carty & Stone, 2011; Adam & Stone, 2011; Morgan & Adam, 2012), デフ・インタープリター (自らがろうである手話通訳者。以下, 「DI」とする) の基本理念を示す論文の概説 (Bienvenu & Colonomos, 1992; Boudreault, 2005; Forestal, 2005; Stone, 2009), 筆者自身が、フィンランドのアロ, マルクス (Markus Aro), アルゼンチンのドゥルエッタ, ホアン カルロス (Juan Carlos Druetta), アイルランドのダン, セナン (Senan Dunne), スウェーデンのアフ=クリントベルグ, ユリア (Julia af Klintberg) 等のDIとともに行った一連のワークショップ (Adam, Aro, Dunne & af Klintberg, 2010; Adam, Dunne & Druetta, 2008) の紹介などで構成される。また本章には、DIたちが各々の人生経験を、通訳という仕事の文化的、政治的、社会的側面に関連付けて検証する、オートエスノグラフィ分析 (Ellis, 2004) の側面もある。本章はDIの背景と仕事を概説し、(1) DIが有するスキルについて理解を深め、(2) DIたちの経験、彼らが用いる手法などについて記述することで、DIの研究に貢献することを目的とする。

DIが果たしている役割の諸側面を表す言葉は手話にも音声言語にもいくつもあるが、本章ではDIと呼ぶ。ここで紹介するDIたちは、古くは2003年ごろから、いろいろな通訳チームを組み、多くの国際行事やイベントで活躍してきた。これら通訳任務での出会いを通して、DIたちは互いの経験や言語背景に大きな違いがあることを知ったが、同時に多くの共通点があることも確認

第9章

ろう児に対する教育政策

— 障害児教育かマイノリティ言語教育か

岡 典栄

1. はじめに

日本におけるろう教育は聴覚障害児に対する特別支援教育の一環として、他の障害を持つ子どもに対するものと同様に行われている。文部科学省のウェブサイトに掲載されている「特別支援教育について 1. はじめに」には、「障害があることにより、通常の学級における指導だけではその能力を十分に伸ばすことが困難な子どもたちについては、一人一人の障害の種類・程度等に応じ、特別な配慮の下に、特別支援学校（平成18年度までは盲学校・ろう学校・養護学校）や小学校・中学校の特別支援学級（平成18年度まで特殊学級）、あるいは「通級による指導」において適切な教育が行われています」と書かれている。すなわち、音声が聞き取れない子どもたちは、聴力に「障害」がある「障害児」として、視覚障害児や肢体不自由児、発達障害児等とともに、その教育上、特別な支援が必要だと判断されている。

木村晴美・市田泰弘が「ろう文化宣言」（1995）においてろう者を「言語的少数者」と定義し、従来の「障害者」という病理的視点から「言語的少数者」という社会的文化的視点へと画期的な転換を試みた後においても、ろう児に対する教育が特別支援教育の枠組みの中で行われていることに違いはない。本章では、ろう教育が特別支援教育の中で行われている現状を概観したうえで、ろう児に対する教育がどうあるべきかを改めて考察する。

2. 特別支援教育の一環としてのろう教育

2.1 経緯

日本における最初のろう学校設立の目的は、1871年の山尾庸三^{やま おうぞう}の盲啞学校

第10章

情報のユニバーサルデザイン

あべ やすし

1. はじめに

本章では、「情報をすべての人にとどける」ことと、「だれもが意見や情報を発信することができるようにする」ことを「情報のユニバーサルデザイン」と定義し、それを実現するためになにが必要なのかを整理する^{注1}。

情報のユニバーサルデザインとは、情報のかたちをその人にあわせる仕組みをつくるということだ。そのためには臨機応変に対応できるような仕組みが必要である。そこで、情報機器を活用したり、情報支援を提供したりすることが要求される。ユニバーサルデザインとは、画一化することではない。理想的なひとつのデザインをつくって解決しようということではない。

この社会には、いろいろな人たちがいる。日本語を第一言語とする人もいれば、日本語を第二言語として学習している人もいる。高齢者には、新語や流行語がわからない人もいる。逆に、若い世代がよくしらないことばもある。はなすのが得意な人もいれば、はなすことに苦手意識をもっている人もいる。声のおおきい人もいれば、ちいさい人もいる。積極的な人もいれば、他人に「あなたは消極的だ」と指摘される人もいる。体のありかたも多様である。生育環境や生活環境も一定ではない。思想や宗教上のちがいもある。それが社会のありのままの現実である。

そのような多様性をふまえて、その社会の構成員がたがいに意見を交換したり、相互批判したりしながら「のぞましい社会」をつくっていく。それが、民

注1 情報のユニバーサルデザインについては、『福祉労働』2009年123号の特集「情報保障・コミュニケーション支援」、『月刊ノーライゼーション』2012年6月号の特集「情報アクセスとコミュニケーション保障」、あべ（2010b, 2011b, 2012b）などが参考になる。ほかにも、本文で直接とりあげなかったものをふくめて、関連文献を「参考文献」に掲載した。あわせて参照されたい。

第11章

ろう児のバイリンガル・リテラシーの育成

ガラテ, マリベル

1. はじめに

本章の内容は、以下を前提としている。

第一に、人間の脳は、音声言語をより好んで、自然な手話言語のインプットを拒絶するような差別はしないということである (Petitto, et al., 2001; Petitto, 2009)。脳にとって重要なのは、与えられるインプットが、完全な自然言語だということだけである。脳の発達および将来的なりテラシー能力・バイリンガル能力の獲得には、早い時期からこうしたインプットを与えることが必要不可欠である (Petitto, 2009; Mayberry, 2007; Morford & Mayberry, 2000)。アメリカ手話のような自然な手話言語は、聴力 (聴, ろう, 難聴) に関係なく、乳幼児の言語発達を促すことができる (Mayberry, 2007; Petitto, 2009)。

第二に、バイリンガルだということは、肯定的なことであり、望ましい資質だということである。バイリンガル話者は、モノリンガル話者と同様の発達過程をたどるが、二重の言語環境を経験することによって、より柔軟な考え方や創造的な思考、コミュニケーションに有利な能力を習得することができる (Hamers, 1998)。

最後の前提は、ろう児が、ろう者の自然言語である手話言語と、自分が生活している地域社会の音声・書記言語によるバイリンガルプログラムで教育を受けることによって、二言語で十分に機能することができるバイリンガルに成長する権利と能力を備えていることである。本章では、手話言語を音声・書記言語と同等の言語として扱うろう教育のバイリンガルモデルの要素について説明する。

第12章

マイノリティと多様なリテラシー

佐々木 倫子

1. 「多様なリテラシー」とは

本書では全体を通してマイノリティ言語話者の多様なリテラシーと社会参加を考えてきた。この章では、リテラシーが何を意味するのか、それがどのように多様なのかを、改めて採りあげる。そして、マイノリティ言語話者の子どもたちの今後のリテラシー育成のあり方を考える。そもそもリテラシーが多様であることを意識させた「マルチリテラシーズ」という語は、ニューロンドングループ（The New London Group, 1996）の提唱に始まる。それから20年近くがたち、もう「ニュー＝新しい」とは言えないが、ニューロンドングループが提唱したマルチリテラシーズ教育は、その後の脱構築の主張が加わり、強い流れとなっている。以下、本章では多様なリテラシーとその育成を考える。まず、日本の文脈で「リテラシー」という語がどのように理解されているかから始めたい。

1.1 「リテラシー」の認知度と言い換え提案

国立国語研究所では、2002年に「外来語」委員会を置いて、種々の調査に基づいて、白書や新聞などの公共性の高い文章に使われている外来語から、わかりにくいと思われる語を選出した。総数176語が選ばれたが、「リテラシー」はそのひとつである。調査で「リテラシー」の意味がわかると答えた人は、当時の国民の4人に1人以下であった。つまり、「リテラシー」は10年ほど前には認知されない語だったわけである。そこで、言い換え語として(1)「読み書き能力」と(2)「活用能力」のふたつが提案され、意味説明としては「情報を的確に読み解き、またそれを活用するために必要な能力」とされた。さらに「元来は読み書き能力のことであるが、現代では情報を読み解き活用する能力の意